

き方とは思えない。

◎従来中間的なものは群集下の単位として扱われてきている。

○高層湿原ではブルト一つとつてみても微細な場所のちがいによるミスゴケの種のちがいがあるが、このような場合種の組合せはどのようにしたら認め得るか。

◎確かに高層湿原では凹所と凸所では群落学におけるクラスのちがいさえみられるだろう。従来は、大きな調査区で不均質な植生を一挙に扱ったきらいがある。今後は複雑な複合群落に対しては、できるだけ小さな調査区をとることが必要である。

○典型亜群集という場合の典型とは何か。

◎他の余分の植物をもたない群集という意味で、言葉の上の典型ということではない。

○植生群が認められた場合、ランクの選択の根拠は何か。

◎分類学におけるランクづけに似てある程度主観的である。

○講演者の群落単位は細かすぎる。Splitter ではないか。群落の命名は現在は細分時代か。

◎そうではない。まとめの時代に入っているといえよう。

○われわれは新しい群落名を発表するのに自信がない。現状は群落名が困乱しているが、統一方向を打ち出すべきである。

◎最初命名者に責任をもたせるために、群落名には著者名をつけることにした。それが形式にかたよりすぎて混乱のもとになったようだ。少くとも現在は亜群集には命名者の名はつけない。本質的なことは命名よりも地域の植生の正しい把握にあることを忘れてはいけない。

〔清水建美要約〕

阿寺溪谷採集会

奥原弘人

この度の採集会は植物分類地理学会と共催で6月9日に木曾の阿寺溪谷で行われた。参加者は併せて40名を越える盛会であつた。

前日夕方野尻駅前の庭田屋旅館に集合し京大の村田源氏から御挨拶があり、夕食後私から木曾谷の概観と阿寺溪谷の植物について概略を申上げた。続いて参加者一同自己紹介をおこなつた後、私共地元の参加者は近くの菅田屋旅館に分れて泊つた。

明けて9日は曇一つない晴天で梅雨時を心配していたことは杞憂に終つた。朝食後カラーテレビ

で志賀高原の野鳥の生態を見た後宿を出た。先ず駅前に植えてあるハナノキを見てから目的地に向つて出発した。国鉄の線路を西に越えるとビロードスゲが多く、少し下るとオオマムシグサも目についた。

木曾川の鉄橋を渡つて阿寺部落に着いてから本格的な仕事が始まつた。今日の予定は阿寺川の右岸に残っている林鉄跡の道を約1.5 km 進み、それから川に沿つて最近開かれた林道を時間の許す限りさかのぼることであつた。然し最も収獲の多いのは初めの林鉄跡の道で、この辺は兩岸に岩壁が立ちはだかつていて最も狭い所である。この辺ではヒメシヤガ・ツゲ・オオバヤシヤゼンマイ・ヤマイワカガミ・ミヤマナツノタムラソウ・コバノイシカグマ・オオキジノオ・マルバノキ・ミヤマトサミズキ・シロモジ・アセビ・ユズリハ・マツカゼソウ・ヤブムラサキ・ヒカゲツツジ・ミツバツツジ・コバノミツバツツジ等表日本や暖地のものが多かつた。

林道に移つてからは新しく現れる物は少なくなつたが、それでもユリノキ・カナクギノキ・ササユリ・イワウチワ・サヤマスゲ・イイギリ・ナガバヤブマオ・ハスノハイチゴ・フジシダ・オオクマヤナギ等があり珍品ニッコウヒヨウタンボクも現れて驚かされた。6~7 km 進んだ辺りで昼食の時刻になつたので各自適当に休んでから又行動を起した。コウヤマキやヒノキの自然林、すくすくと育つたヒノキの人工林に感歎する者、ヒメシヤガの自生やマルバノキ・シロモジを珍しいという者等、採集や観察に忙しかつた。採集した物はその場で野冊に挟む者、植栽用に根を包む人もあつて、それぞれに荷物が重くなつた。

午後は暑さも相当で、初め「この谷は無限に面白い」と喜んでいた関西からの婦人参加者も相当に疲れたようであつたが最後までよく頑張つた。先頭が約9 km さかのぼつた辺で予約しておいた貸切バスが追いつき帰途についたのは15時30分頃であつた。

これから上流にはキノキイチゴ・ミヤマモミジイチゴ・エゾユズリハ・オオバメギ・オオヤマレンゲ・ゼニバサイシン等が見られるが時間の関係でこれらは後日に譲らざるを得なかつた。

バスは予定より早く16時頃駅前に着いた。直ちに宿に預けておいた荷物を受取つて解散し南と北に向つてそれぞれ帰途に着いた。

今回の採集会では採集物の他に両学会の会員が面識を得たことも収獲の一つであつた。御指導をいただいた村田先生に厚く御礼を申し上げます。

この度の参加者は 浅原協・梶幹男・清沢清親・清水建美・白井幸良・土田勝義・中山列・林一六・平林国男・八幡泰平・鷲沢正明・奥原弘人の諸氏であつた。

終りに蛇足のようであるが、この溪谷で目についた物の中の二三について記して結びとしたい。

ニツコウヒョウタンボクは水分を好むらしく、この谷の中程で水辺にあつた。枝は細く4稜あり、花は白色（蕾では紅みをもつ）で花筒下部の下面にキンレイカの距のような、ふくらみがある。産地は大日本樹木誌には日光・秩父・白根連山・紀伊・日本植物誌には関東・甲斐の産とあり、日本樹木検索誌には関東・南アルプス・紀伊とあるが、木曾谷もその限られた産地の一つであることがわかつた。

サヤマスゲはヒノキ林などの乾いた所や岩棚のような所で見られる小形で柔いスゲである。日本植物誌には近江・美濃・飛騨・信濃南部に稀に産するとあり、原色日本植物図鑑には滋賀県・岐阜県とあるが、木曾谷では南西部の山地に多く、南東部でも見られる。山を越えて下伊那の西部山地に及んでいないかということを問題としたい。

ヒメカンアオイは南信・東海・伊勢が産地とされているから伊勢湾周辺要素とみてよいであろう。木曾谷でも須原辺から南でこの形が見られ阿寺溪谷でも下流ではかなり目についた。葉は卵形であるが、この溪谷の上流や木曾谷の中部や北部のものは円形のゼニバサイシン（キソジノカンアオイ）となつている。これは開田高原の草原に多い。

交換図書雑誌目録

本会が今までに交換入手した出版物は次の通りである。巻・号・数は省略し誌名、発行者、出版年のみを集録した。

1. 雑 誌

津軽植物（津軽植物の会）	1968	福井県博物同好会々報（同、同好会）	1955～68
千葉植物誌（千葉県生物学会）	1968	京都植物（京都植物同好会）	1952～69
千葉県動物誌基礎資料（同上）	1968	三重生物（三重生物教育会）	1968
信濃路（信濃生物会）	1967～68	Nature Study（大阪自然科学研究会）	1968～69
信濃生物（信濃博物会）	1967	近畿の植物（近畿植物同好会）	1968
山と博物館（大町山岳博物館）	1967～68	植物趣味（東亜植物学会）	1950～68
下伊那生物会誌（下伊那生物会）	1969	香川生物（香川生物研究会）	1967
じねんじょ（植物同好じねんじょ会）	1965～67	山草（愛媛山草同好会）	1968～69

2. 図 書

信濃の自然シリーズ（信濃生物会）	1～4	1967
------------------	-----	------